

YAMAGATA

復興ボランティア ガイドブック 2011 冬 復興支援版



はじめに

2011年3月11日の東日本大震災。その爪痕は
あまりにも大きく、多くの涙と汗を伴いました。

半年以上たった今でも、たくさんの方が被災地へと足を運び、さまざまな支援活動をおこなっています。

「つながろう！ささえあおう！復興支援プロジェクトやまがた」では、8月6日に「復興ボランティア支援センターやまがた」を開設し、多くの支援団体の皆様の協力をいただきながら、支援活動の情報発信などの可能な限りのサポートをしてきました。

被災された方々が、発災前の安定した生活に戻れるその日まで、支援活動は続きます。同じ東北人として、私たちにできることは何かということを考え、見つめながらこれからも進んでいきたいと思えます。

現地では、まだまだ支援の手が必要な所がたくさんあります。これまで活動をおこなってきた方も、これから何かしてみたいという方も、さらなるアクションにむけて本ガイドブックが一助となれば幸いです。

復興ボランティア支援センターやまがた
スタッフ一同

Contents

- これまでの活動と現状・・・2
- 生活支援活動・・・・・・・4
- 復興支援活動・・・・・・・9
- 環境を整える活動・・・・12
- ボランティア談・・・・・・・15
- Infomation・・・・・・・17



これまでの活動と現状

3/11 東日本大震災

●発災直後からの動き



2011年3月11日14時46分、三陸沖を震源として東北地方太平洋沖地震が発生。三陸沖最大マグニチュードは9.0を記録、東日本を中心として極めて激しい揺れが日本列島を襲い、この地震によっては波高10m以上、最大遡上高40.5mにも上る大津波が発生し、東北地方と関東地方の太平洋沿岸部を襲いました。地震と津波による被害を受けた東京電力福島第一原子力発電所では、全電源を喪失して原子炉を冷却できなくなり、大量の放射性物質の漏洩を伴う重大な原子力事故に発展しました。これにより、原発のある浜通り地域を中心に、周辺一帯の福島県住民は長期の避難を強いられるようになりました。



山形県をはじめ、東日本一帯の広範囲では停電が起こり、一夜明けて徐々に停電が復旧されるにつれ、その被害の大きさが私たちの耳にも届くようになりました。

山形県では、発災直後に「山形県災害対策本部」と「山形県災害ボランティア支援本部」を設置し、復旧に向けた取り組みを開始しましたが、同時に県内から多数の人が自発的に被災地へ車を向け、救助活動をおこなっていました。

一方、県内では宮城・福島から、避難のために多くの人が入県しました。体育館や公民館などが避難所として開放され、炊き出しや物資の支援が始まりました。

岩手・宮城・福島に近い山形県は、物資配給の拠点として中核的な役割を担い、山形空港をはじめ各所から被災地へと物資が届けられました。



●ボランティアによる復旧支援

4月に入ると、県外被災地に向けた大型バスによる「ボランティアバス」という取り組みも県内各地で始まりました。山形県からは、日帰りのボランティアバスで多くの人が現地に向かい、漂着物の撤去、家屋の清掃・修復、泥だしなどをおこないました。



悪臭やアスベストから身を守るため、マスクをつけながら長袖・長靴での活動は、夏には熱中症が懸念されましたが、それでも多くの人が被災地へと向かいました。



●増加する県内への避難者

発災から3か月を過ぎた頃から、閉鎖する避難所が増え始め、県外では避難所を出た被災者は仮設住宅、被災した自宅、借家などへ移り始めました。一方、原発事故による被害は収束せず、原発事故による福島県からの自主避難者が県内に急激に増加。山形県では借り上げ住宅制度を設け、受け入れを強化しました。アパート等で暮らす避難者へのサポートが重要視される中、徐々にそのような避難者にむけた物資提供や交流支援などの活動が始まりました。

●仮設住宅が続々と完成

被災地では、やや遅れ気味だった仮設住宅の建築も徐々に完成を迎え、抽選等で当選して仮設住宅に入居する人が増えてきました。しかし仕事を失い生活の見通しがたたない方も多くおり、物資や炊き出しの支援が続きました。



また、新たなコミュニティのための支援が求められ、仮設住宅でサロンやイベントの開催にもボランティアが活動しました。同時に在宅避難者には行政の手が届かないため、ボランティアによる支援が必要な状況が続いています。被災県で作られた仮設数完成数は約5万戸（2011.12.5 国土交通省調べ）。

●ボランティアの拠点開設

8月6日、「復興ボランティア支援センターやまがた」を山形市に開設。県内外のボランティア支援拠点としての活動を開始しました。

県外への支援として、さまざまな情報の仲介や支援団体のサポートをおこない、「山形ボラバス推進コンソーシアム」と連携してボランティアバス運行をバックアップ。また、県内支援としては、避難者へ情報を届けるためのフリーペーパー「うえるかむ」を発行しました。

●支援は復旧から復興へ

それぞれができることを精いっぱいおこなってきたであろうボランティア活動。今、これまでを振り返り、そして未だ生活の基盤が成り立たない方が多くいる被災地へどのような支援をしていくか、県内にいる避難者の方々にはどのようなサポートが必要かを改めて考え、支援を継続していくことが私たちの役目であると考えています。

復旧から復興へ。新たな支援が、今も求められています。



生活支援活動

震災から半年以上たった現在、発災直後からの課題とともに、新たな課題も生まれています。たくさんのものを失った方々が、不便のない生活を送ることができるようになるためには、まだまだ多くの支援が必要です。

必要な物を提供する活動

●食料品 ●日用雑貨品 ●家具・寝具 ●学用品 ●ベビー用品 など

事前に地域調査を行い、どこの地域に、どんな物資が、どのくらい必要かを詳しく調べます。その上で物資を購入、または企業や一般から物資を集め、配達や広場を使った配布会を行います。各個人や家庭に不公平さが出ないように、数量の調整、告知や配布方法が必要です。食品を扱う場合は、賞味期限などに配慮し、物資管理を徹底しましょう。

- Point**
- ・ 保存状態の悪いものや中古品など、自分がもらって嬉しくないものは贈らない
 - ・ 米や調味料、消耗品などはたくさんあっても困らないのでニーズは高い
 - ・ 応援メッセージを添えると心が見える支援になる



くらしをサポートする活動

●防寒対策 ●子どもの遊び ●勉強のサポート ●介護補助 など

被災された方のくらしが豊かになるためには、まだ数々の壁を乗り越えていかなければなりません。その壁を乗り越えるためのサポート、もしくは毎日の生活をサポートをすることで、少しでも被災された方々の負担が軽減することを目的に、多種多様な活動がおこなわれています。

わたしができる活動は何かな・・・

情報の支援
(看板掲示板、地図の設置等)

住まいの支援
(防寒対策、家屋修繕等)

子どもの支援
(勉強のサポート・遊び等)

交流の支援
(サロン・イベント開催等)

その他の支援
(その他いろいろ)

<活動例>

情報の支援（看板・掲示板、地図の設置等）

掲示板、地図の設置は、情報共有の第一歩です。皆が集まるきっかけになるので、誰でも掲示・閲覧できるような場所に設置しましょう。ビニールカバーやクリアファイル等を利用して、雨にぬれても大丈夫なように工夫します。

地図にはゴミ集積所や空きスペース、危険な場所も記載しておく役立ちます。仮設住宅周辺のお店や施設等のお役立ち情報も加えるとよいでしょう。



すまいの支援（防寒対策、住宅の修繕等）

仮設や住宅の作りによっては、防寒対策を施すボランティアが必要な場合があります。仮設住宅や在宅避難者を周り、防寒対策が無い場所へ訪問、作業します。プライベートな空間に入るので、傾聴をする心構えを忘れずに。防寒対策としては、窓枠を覆えるプチプチシートを両面テープで窓枠ゴム部分に張りつける活動などがボランティアでも可能です。

交流支援（サロンの開催）

避難所や仮設住宅では、被災者同士が知り合えるイベントやサロンの開設が、心のケアや孤独死防止にもつながります。県内避難者支援でも、同じ境遇の人が集まれるサロン作りは、情報交換の場にもなり、新たなコミュニティを作るのに効果を上げています。

[方法] 自治体と連携し、場所を確保する。お茶やお菓子、足湯など、交流のきっかけになる企画を用意し、参加対象となる方々に告知する。参加しやすい雰囲気作り、公平さを保つ心配りが大切です。

- [開催例]**
- お茶会、カフェの開催
 - プロ、アマ、住民リサイタル
 - 支援物資の配布会
 - 料理教室
 - 出張理容室やマッサージ
 - 体操やヨガ教室 などなど



子どもの支援(勉強のサポート・遊び等)

震災の影響で勉強が遅れた子ども、受験を控えた子どもの学習支援は、同年代が集まるコミュニケーションの場にもなります。

通常は仮設住宅内の集会所での活動となります。地区によって小学生から高校生まで、人数や学習科目、日時がバラバラなので、事前に仮設団地自治会などにスケジュール等を確認する必要があります。



[注意点] 学習という性質上、継続性が求められます。同一人物が教えなくても構いませんが、チーム(団体)として定期的に支援することが大切になります。

その他の支援

お庭を彩るプランタ作りや家庭菜園、高齢者のための介護支援、買い物を手助けする支援など、生活のあらゆる場面で工夫を凝らした支援が可能です。

万人に向けた支援だけでなく、障がいをもつ方や妊婦さんなど一部の方に対しての支援も必要不可欠なもの。周囲に目を配り、どのような支援が求められているかを検討して実施しましょう。

遊びで子どもたちに笑顔を

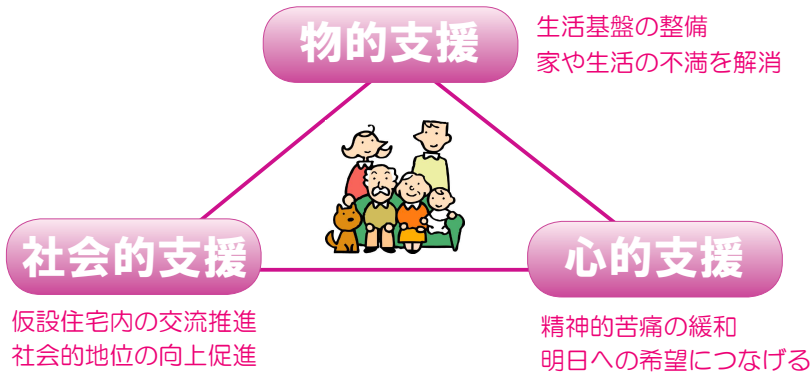
だがしや楽校普及員 佐藤仁さん

4月から7月までは被災地の子どもたちに日本玩具協会から委託された30トンのおもちゃと「えがおの花」プロジェクトから委託されたデュエルマスターズカードを直接配って回っていましたが、自治会がたちあがり始めた9月以降はコミュニティの形成と自立のために現地で駄菓子屋さんを募集し、毎日子どもたちに駄菓子とカードを配っていただき放課後の世話をお願いしております。現在南三陸に6カ所のコミュニティ駄菓子屋が稼働中。毎日仮設に響く子どもの元気な声にお年寄りも勇気づけられてるとのこと。先般、全国共同募金会の助成事業に採択され今後ほかの地域にも拠点を増やすべく声をかけていきます。



仮設住宅での支援活動

仮設住宅で生活を始めたとしても、期限付きの仮の生活空間であるため、不便な生活である事には変わりません。仮設住宅という特殊な環境の中では、衣食住に不備がないかを確認し、そこに住む方々が互いに信頼しあい、コミュニティを形成するまでの支援が求められています。



仮設住宅では一方的に物を与えるといった支援だけではなく、住民の方達と『一緒』にすることが基本姿勢になります。

そして、あくまでも主役は住民。住んでいる方々の迷惑になるような過剰な支援にならないよう配慮が必要です。ボランティアはサポーター、いわば脇役です。支援者がいない時、支援が終わった後に、仮設住宅にいる方々が困ることがないように気を配り、活動をしていきます。

たとえば

お花で心をいやす
プランター作り

季節に応じて、仮設や被災した地区の被災した方々の生活に花を添えるお手伝いです。

[方法] 植物は丈夫で管理の容易な種類を選定しましょう。冬前に植える場合は、越冬し、来春まで楽しみを継続できる草種が良いでしょう。育つ上で、人との話が盛り上がるよう



な植物を選ぶのも大切。同じプランターを住民の方とたくさん作って、個人配布、共有スペースに配置する事で、「仲間意識」を高める事にもつながります。

復興支援活動

復旧がある程度進んでも、実際に生活を営むためには地域社会の基盤がないと成り立ちません。復興に関係する支援には様々な形がありますが、ここではボランティアが参加できる活動の一部を紹介します。

農業を支援する活動

被災者にとって、農地の整備は収入源の確保のための大切な作業です。しかし、土地の整備は人手と時間がかかるため、ボランティアによる長期的な支援が求められています。田畑の漂着物の撤去や雑草の除去、ビニールハウスの設置、収穫に至るまで、さまざまな種類の作業があります。

[注意点] 草の上は柔らかそうですが、釘などの鋭利な漂着物が埋まっている可能性がある為、鉄板入りの靴を履くことが必須です。



漁業を支援する活動

牡蠣やほたての養殖準備、わかめの種付け、漁具づくりや設置などがあります。

[注意点] 初心者でもできる作業が多いのですが、商品となる物を扱う場合もあるので、作業方法をきちんと教えてもらう事、丁寧に作業する事が大切です。



就労を支援・サポートする活動

仮設住宅では、身近で入手できる素材で物作りをし、商品として売るといった支援も数多く見受けられます。販売で得た利益は、被災者の生活費や自立するための資金にしてもらうことで、就労や自立に役立ちます。作業自体が被災者の生きがいとなる事もあり、心理的な支援にもなります。

コミュニティがまだできていない地区では、多数の人に集まって作ってもらう事で、コミュニティ作りのきっかけとなる場合もあるでしょう。

イベントを開催・サポートする活動

現地でイベントをおこなったり山形に招待するなどして、イベントで被災者を励ますことも大きな心的支援につながります。さらに現地でイベントをおこなう場合は、被災地の人々の経済的、心理的な効果を生み出す事が期待できます。しかし立て続けに行くと被災者を疲れさせてしまう場合もあります。イベントの”押し売り”にならない様な配慮も必要です。



現地の商店や商売を始めたいという人と協力しておこなう事で、地域の活性化にもつながります。市町村や地域の組合、起業家の方などと連携して、地域に密着できる活動をしましょう。

イベントに携わるボランティア活動だけでなく、現地の産物を購入、利用して被災地にお金を落とす事も、被災地支援につながります。

【イベント例】 クリスマス、お正月、コンサート、物産市など

イベントで炊き出しサービス！

【方法】 炊き出し支援は、市町村や地域によっても方法が異なります。日時、可能提供数、調理場所、提供場所、告知方法など、事前にしっかりと情報収集、連絡を取り合いましょう。

現地のガス、水道、電気事情、住民の数を調べ、提供できる食事数を把握します。提供できる食事数は調理用鍋（寸胴）の大きさ×個数で決まります。



列ができた場合、食材が足りなくなった場合は来られた方に伝えましょう。最後に器材、ごみは必ず持ち帰りましょう。

避難所では生活の糧として必要だった「炊き出し」のノウハウ。今は、被災地の人々を元気づけるためのアクセントとして喜ばれています。

避難所での炊き出しでは「物を持って行くだけでなく、僕らの気持を持っていこう！」を合言葉に活動しました（公益社団法人日本青年会議所東北地区山形ブロック協議会 満田さん）

心のケアにつながる活動を心がけよう

様々なボランティア活動の中もしくは慰問等で、被災された方々と話をする場面は多々あります。

「話をする」ということは、それだけで心の自浄作用がありますが、返す言葉や対応を間違えると、思いがけず相手を傷つけてしまったり、不快な思いをさせてしまうこともあります。相手を思いやる気持ちを忘れずに活動することが大切です。

【ポイント1】聞き上手になる

会話はよくキャッチボールに例えられます。相手の言いたいことを「そうなんだね」とキャッチすると、「それで…」とボールを返すことができます。「でも」は否定する（ボールをはじく）ことになるので、要注意です。

【ポイント2】上から目線にならない

「してあげているんだ」という気持ちが少しでも心の中にあると、自然と会話の中にあらわれてしまいます。上から目線になっていないか、もう一度自問してみましょう。

【ポイント3】対応の方法を見極める

心の傷の深さによっては、専門的なケアが必要な場合があります。そのような時は、その後どのような支援が必要かを見極め、専門家につなげるなどの対応をしましょう。

【ポイント4】自分自身のケアを忘れずに

思いや哀しみを心の中に受け止め続けていると、支援する側も落ち込んだり心が疲れたりします。心の中のさまざまな思いを仲間と語り合い、自分自身の心のケアもおこなうようにしましょう。

心のケアの活動は、会話の中で心をいやす「傾聴」、話すだけの場を設定する「自助活動」などがあります。カウンセリングにつながる分野なので、活動を継続して深めたい人は講座・講習などで学習するとよいでしょう。

環境を整える活動

一段落ついたかに見える復旧作業ですが、まだまだ作業を必要とする場所があります。その内容は、誰でもできる簡単なものから、高度な技術を要するものまで。ボランティアができることは応急処置ではありますが、被災者の方が少しでも安心して生活ができるよう、活動が続けられています。

被災漂着物の片付け

民家内の漂着物など、廃棄するものと残すものを分ける場合は、重機ではなく人の手を要するので、ボランティアが活躍します。依頼主にとって大切なものも含まれているため、保存する物を置く場所を決めておいたり、取り扱いや言葉遣いを気を付けながら、慎重に作業を進める事が不可欠です。



泥かき

震災で発生したヘドロは、町中の側溝や田畑、建物内外のあらゆる場所に流れ込みました。その成分は海や田畑の底泥、汚泥廃棄物、腐敗物などが混在したものであるため、有害である危険性が高く、マスクやヤッケ、ゴム手袋はもちろん、鉄板入り長靴の着用など、万全の装備で作業にあたる事が必要です。



大工手伝い



半壊した家屋の解体や修理には巨額の資金を必要とします。また、大きな震災である程、建築業者の予約が取れず、ボランティアに基礎大工作業を求められる場合があります。

材料の調達や電気工具が準備できるかを事前に依頼主と話し合い、可能な範囲で作業をします。ある程度の大工仕事の基本知識が必要です。

冬の災害ボランティアの服装・持ち物チェックリスト

一般的な復旧活動をする場合の必携品としてご覧ください。

活動内容によっては使用しない装備もあります。ご了承ください

名 前	説明など	☑
ぼうし	ケガの防止、タオルでも可、床下作業の場合はヘルメット	
衣類（上）	長袖で肌の露出が少ない、捨ててもよい服	
衣類（下）	肌の露出が少ない、捨ててもよい服	
ヤッケまたはカッパ	冬は赤やオレンジなど、目立つ色が良い	
タオル	3～4枚ほどを余分に持って行くことをおすすめします	
着替え	服（上下）、靴下の他に下着もあると尚良い	
防塵マスク	N95規格のものを推奨	
作業用ゴーグル	曇り止め仕様のものを推奨	
ゴム手袋	防水・耐油のものでロングタイプ	
軍手	ゴム手袋の中に装着	
皮手袋	〃	
安全靴または長靴	動きやすく、履きなれた頑丈なもの	
鉄板入りインソール	長靴など、作業時の履物の中に必ず敷く	
サンダルやスニーカー	車内での履き替え用	
ビニール袋	数枚。ゴミ入れ、汚れたもの入れ	
除菌用アルコール	昼食前や休憩前の雑菌除去に便利	
ティッシュ、ハンカチ		



名 前	説明など	<input checked="" type="checkbox"/>
保険証のコピー	健康保険& ボランティア保険	
携帯電話	身に付ける場合はジップロック式のビニール袋で保護する	
常備薬	個人で必要なもの	
筆記用具	ボールペン・油性マジックが一個ずつあるだけでも良い	
懐中電灯またはヘッドライト	冬の屋内は暗いため日中でも使用する場合もある	
ホッカイロ	3～4枚ほどを余分に持って行くと安心	
ダウンなどの防寒具	多少汚れてもよいもの 洗えるものがよい	
水	飲料用・救急処置用 1人1～2リットル	
昼食	腐りにくいもの	
塩分含有物	梅干し、漬け物、塩あめなど	
スポーツドリンクなど		

基本は「ボランティアガイドブック夏版」の装備と変わりませんが、
寒暖の差に対応できる服装とグッズに心がけましょう。

また、地域によっては現地で購入できる物も
増えてきました。主催者の案内に沿って必要なものを揃えて下さい。

あの日から始まった、ボランティア活動。なにを感じ、

○長井市・吉川さん

3.11以降、現地の混乱した様子から、現地へ行く方法をとずっと探していました。その中で出会いに恵まれ、4月末に石巻に入りました。あの日のことは、今でも忘れることは出来ません。

現地に入って半年、状況はそれぞれ、しかも刻一刻と変化しています。日々新しいことの連続で、今も地域間や被災者間の格差問題、精神面問題に直面する事もあります。辛い想いや自分の至らなさを実感する事も多々あります。しかし、私が関わった多くの現地の方々、物資や情報も嬉しいけど、来てくれるだけで嬉しい、忘れないでいてくれることが嬉しいと言ってくれます。その言葉に支えられ、本当に多くの現地の方々や仲間との出会いに恵まれ、活動を続けてくる事ができました。現地には来られなくても、遠くの地から応援してくれる方の声にも、とても支えられています。

ボランティアの最終目標は、自分たちの活動が必要ない状況になることです。必ずその日を見届けるべく、支援を続けていこうと思います。

○東根市・小野さん

震災直後から、何か手伝えることはないか、一度現地へ行きたい、という想いでボランティアにいく事を決め、4月半ばにボランティアバスに乗ったのが始まりでした。自宅避難されている方を検索した時のこと。全壊した家が多く、ほとんど住人のいない地区で、おじいちゃんとおばあちゃんが二人で暮らしていました。津波で荒れてしまった小屋をきれいにする気力もなく諦めていたので、友人と二人で小屋片づけを手伝いました。自分たちが小屋掃除を始めると、おじいちゃんもおばあちゃんも一緒になって作業をはじめ、小屋はみるみるきれいになりました。少しの事でも、手助けになる。そう感じました。それ以降、おじいちゃんの家に行く度に様子を見に行くようにしています。お歳なので覚えていない事もありますが、「一緒に小屋片付けたよ」と言う思い出してくれ、決まってアメ玉をくれます。困っている人のお手伝いをする。ただ、それだけで良いのだと思います。

なにを得たのか。それは1人ひとり、たぶんちがう。

●山形市・山崎さん

震災の日は、一人でラジオを抱え、不安な夜を過ごしました。電気が通り、テレビで映像を見た時の衝撃は非常に大きなもので、助かった！という想いの傍ら、大変な人たちに何か支援をしたいという想いが湧きました。しかし、自分以上に怖い思いをされた方々に未熟な私に何が出来るのか分からず、なかなか始められない日々が続きました。

震災から半年後、話相手になるだけでもと思い始め、ボランティアに行く事を決めました。

初めてお手伝いをしたその土地のご主人は、流れて来た家に潰されて亡くなったと聞き、そのご家族はどんな思いで生活をしているのかと思うと、心が痛み、その日は複雑な気持ちで作業をしました。

時間と共に、生活支援や土地はきれいに片付いていくとは思いますが、しかし形に見えない心の傷は深いものがあり、人それぞれ立ち上がる時間も力も違うと思います。

ボランティアを始める前は、自分に何が出来るのか分からないとためらっていましたが、今は小さな力でも合わさり、大きな力になるのだと思うと、何でも良いからやらせてもらおう、と思うようになりました。

これからも、被災者と寄り添う気持ちで顔を合わせて触れ合えるボランティアをさせてもらえたらと思います。

現地でどんぴきされるボランティアとは？

嫌われボランティアはこんな人！

「わたくし中心主義」ボラ
 対象（活動の）が何を求めているかよりも、自分の生き方、活動趣味、活動の仕方を中心に考え、行動する。

お遊び ボラ
 遊びにグループに入ってきたような人。

「やってやる！」ボラ
 無償で「やってやるのだ」という顔をして、相手の誇りを傷つける。

ボス ボラ
 仲間を支配することばかりを望み、他の人（リーダーを）交代しようという気が無い。

お返し拒絶 ボラ
 対象者からのいかなるお返しも拒絶。「いいのよ、私たちボランティアなんだから」

ボランティアとは？ ボラ
 ボランティアとは一体何だろう？という疑問を出すだけの「悩み」専門。

忙しい ボラ
 いつも「忙しい、忙しい」とグチっている人。

言っただけ ボラ
 有言不実行。グループに顔を出してはいろいろ言うが、自分ではやらない。

「あなたは対象者よ」ボラ
 対象者が何か社会の役に立ちたいと思ってもさせない。

目立ちたがり ボラ
 自立した活動だとやりたがる。活動だとやりたがる。

お墨付き欲しがり ボラ
 活動を行政機関等にみとめてもらおうとすり寄る。

善意押しつけ ボラ
 相手が嫌がるのも構わずに、善意を無理やり押しつける。

しぶしぶ ボラ
 自分では好きでもないのに、やってあげるのだと言い、何かというグチが出る。

悪口 ボラ
 活動の対象者の悪口を平気で言う人。

自発性欠如 ボラ
 頼まれたらやる。自ら進んで何かをしようと思わない。



おわりに

これからも必要であると考えられる支援活動を中心に制作した「復興ボランティアガイドブック」。しかし、どんな活動でも、最終的な目標は「笑顔と希望が満ちること」の一言に尽きるのかもしれませんが。

それは、被災された方々だけのことではありません。ボランティア活動をする支援者も同じです。生活や健康に支障のない形で、無理なく支援する方法を見出しながら、お互いに息の長い支援を続けていきましょう。

少しでも皆様の支援活動のお役にたてれば幸いです。

謝辞

本書を作成するにあたり、支援者の皆様から、情報や写真の提供等のご協力をいただきました。ここに改めて御礼申し上げます。また、本書の発行に際してご指導・ご監修をいただきました松本昌順様に、心から御礼申し上げます。

復興ボランティア支援センターやまがた



復興ボランティア支援センターやまがたでは、ボランティアや支援をしたい人としてほしい人をつなげるために、情報の収集や受発信、コーディネートサポートなどを行っています。

「ボランティアをしてみたい」「支援したい」という方は、同センターまで、お気軽にお問い合わせください。



開館時間：9：00～17：00
休館日：毎週土日祝日、年末年始等
〒990-2412 山形県山形市松山三丁目14番69号 (FM山形ビル1階)
TEL 023-674-7311 FAX 023-674-7312
E-mail kizuna@yamagata1.jp
WEB <http://kizuna.yamagata1.jp/>

運営／つながろう！ささえあおう！復興支援プロジェクトやまがた

YAMAGATA
復興ボランティアガイドブック
2011・冬 復興支援版

復興ボランティア支援センターやまがた

〒990-2412 山形県山形市松山三丁目14番69号 (FM山形ビル1階)

TEL 023-674-7311 / FAX 023-674-7312

<http://kizuna.yamagata1.jp> / E-mail kizuna@yamagata1.jp



「つながろう！ささえあおう！復興支援プロジェクトやまがた」

(特活) 山形の公益活動を応援する会・アミル / (特活) ディー・コレクティブ /

(特活) Yamagata1 / 山形県生活環境部生活文化課県民活動プロスポーツ支援室